トワークは柔軟であり，多方向的に拡大した一方，オセアニア海域の海民は，特定集団同士の交換を目的とするため，移動航海は一定の地域内で循環し，完結した．また，東アジア海域においては，これら両方の要素を兼ね備えていた．

空間も時間も超えた海域ネットワークが広く論じられたことはこれまでの「海民」研究を再考させるものであり，今後も参照され続ける良著であろう．

鶴田　綾.『ジェノサイド再考―歴史のなかのルワンダ』名古屋大学出版会，2018 年，vi＋352 p.

近藤有希子 *

歴史はいかに描けるだろうか．

本書は，多数派民族集団の「フトゥ」による少数派の「トゥチ」に対する大量殺戮として，これまで，ともすると安易な単純化のもとに描かれてきたルワンダのジェノサイドを取り上げて，その「標準的な説明」（p. 1）の刷新に向けて，果敢に取り組んだ労作である．

著者をして「停滞」（p. 5）した印象を抱かせるルワンダの歴史研究に対して，著者はいくつかの分析視角を携えて挑戦している．ひとつに，著名な歴史家の提言にもあるように，歴史のダイナミズムや当時のモメンタムを捉え損なわないようにすること．ひとつに，トゥチやフトゥ，ベルギー人といった集団間関係の考究とともに，集団内の関係や対立にも目を向けること．ひとつに，国内・国際・ローカルという各層の政治レベルの交錯に敏感であること．

なかでも，著者は 1950 年代および 1960 年代という，アフリカ各国で独立が達成された重要な局面に焦点をあてる．ルワンダについては，「フトゥによるトゥチ王国の打倒」が達成された時期として一元的に説明されてきた期間である．植民地帝国から離脱したこの時代を核心として，著者は過去から現在に至る「紆余曲折」，つまり「暴力回避や『和解』への提案，暴力的でない未来の可能性」（p. 22）を追求してきた．

そのときの手法は，各国に散逸してきた史資料の分析を中心としている．度重なる紛争によって被害を被ったルワンダの公文書館の脆弱さゆえに，旧宗主国であるベルギーにはじまり，米国，英国，イタリアと，文字どおり世界中の公文書館や図書館を飛び回って，現在に至る「ルワンダ」，および本書の関心となる「ジェノサイド」を構成する断片を収集している．

以下，全体の構成を概観する．

第 I 部では，1950 年代前半までのルワンダが対象にされる．まず第 1 章で，植民地化以前の 19 世紀～20 世紀中盤，エスニシティが国家形成の過程のなかで漸進的に形成されてきたこと，それが植民地支配のもとで明確化・固定化されたことが確認された．さらに，トゥチとフトゥの関係や国家権力の影響には地方ごとの差異があり，トゥチのリー

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ダーのあいだで権力争いが存在したことにも注意が向けられた．

第2章では，1950年代中盤から1959年秋までに焦点をあてて，革命直前のルワンダでおこなわれた改革と政党政治のはじまりが論考される．1950年代後半，トゥチの伝統的指導者と革新的エリートの対立にはじまり，続いてフトゥのエリートたちが政治的・社会的不平等の是正に向けた改革を求めるようになった．しかしここでの要点として，フトゥのエリートたちがこの時点において革命を志向していたわけではないことが明かされる．

本書の主題は第II部であり，革命および独立の過程が入念に省察されていく．第3章では，1959年11月に起きた万聖節の騒乱について，その具体的な過程とベルギーの対応，そしてその影響が追究される．暴力はルワンダ中央部で発生し，当初はトゥチ・フトゥの双方向的なものとされた．しかし，その広がりに目を向けてみれば，各地の人口密度や土地不足の状況とともに，王宮との歴史的な関係が，地域ごとの暴力発生の相違を生み出していたことが検証される．

1959年に発生した暴力は，ただちにトゥチとフトゥの集団の対立として形成されたわけではない．第4章では，1960年代初頭の政党協調と対立の萌芽について探求される．当初対立していたのは，トゥチの伝統的リーダーとその他であったことが強調され，1960年代前半には立憲君主制や連邦制などの構想が出されていた．政党間には合従連衡関係が存在し，トゥチとフトゥとの関係は対立的なだけではなく，協調の可能性が残されていたことが明示される．

第5章では，1960年～1961年の革命が発生する過程について解明される．1961年1月末にフトゥ政治家によるクーデターが起き，トゥチの王制が実質的に廃止されたことによって革命が完遂するが，そこにはコンゴの独立，ベルギーの政策変更，および冷戦にかかわる国連での論議が，つよく影響を与えたことが示された．

第6章では，クーデター後から1962年7月にルワンダが独立を果たすまでの過程が精査される．1961年までのルワンダには，隣国のブルンディやコンゴとの政治連合や共同体など，さまざまな「国家」の可能性が存在していた．しかし結局，ルワンダはベルギーとの関係を維持したまま単独の主権国家として独立する．この間，暴力の性質も器物や住居の破損から殺害へとエスカレートしていた．

第III部では，革命・独立後のフトゥ共和制下における政治，およびトゥチ・フトゥの関係について点検される．第7章では，独立後のフトゥ政権期における国内の政治や国際関係が辿られた．初代大統領であるカイバンダ政権において一党体制が成立した後には，党内部，とくに地域間の対立が重要になり，それはそれ以降のルワンダ政治を規定していくものとなる．この時期，国際関係においては国外の難民と援助関係が重要な課題としてあった．

本書の「出発点」（p. 196）と目されるジェノサイドについて，第8章で説明される．そこでは，内戦と複数政党制の導入が同時に

進む状況下において，ルワンダ国内は急進派が力をもつ暴力的な空間になっていったことが言及される．

第 IV 部では，ジェノサイド後のルワンダが描写される．第 9 章では，1994 年以降の「新しいルワンダ」をつくる取り組みが，政治・経済・国際社会とのかかわりといった側面からひろく取り上げられた．

第 10 章では，植民地時代に西欧から持ち込まれたハム仮説に影響を受けた，各々の権力者による歴史認識が考察される．同時に，著者自身がルワンダでおこなった聞き取り調査から，「正史」とは異なる多様な記憶が存在していることが浮かびあがる．

著者はあくまで歴史を「実証」（p. 28）することにこだわり，それを手放すことなく，紙資料をもとに堅実に記述を積み重ねていく．そのことによって，「トゥチ」「フトゥ」「ベルギー」「国連」など，一枚岩ではない集団の解体を試みる．主として扱う資料は異なるものの，基本的にそのような姿勢は人類学を学ぶ評者と軌を一にする．なにより，1950 年代および 1960 年代のルワンダで，政党間の対立に限らない，協力的な関係の生成する可能性をうかがわせた描写は，現在のルワンダの権威主義的な体制を前にしては見いだせないものであり，刹那であるが鮮やかな躍動感を感じさせるものであった．

とはいえ，現存する限られた紙資料でそれに取り組むことによって零れ落ちてしまうものがあることは，著者自身も自覚しているとおりである（pp. 314–315）．つまり，それらの資料は多くが力を有する男性のあいだを行き来して残されてきたものであり，女性や子ども，農民といった多様な「普通の人びと」の存在，その「普通の人びと」の多義的な振る舞いが可視化されにくい．

そのことによって，「トゥチとフトゥの対立がいかに形成されてきたのか」という本書における重要な問い，つまりエスニシティが政治化する過程についての説明も，一般大衆の側からそれを思考しようとすれば，限界を感じる部分もあった．フトゥ上層部に「トゥチ」というカテゴリーを一纏めにして，「（自分たちを）殺しに来る」（p. 140）「敵」とみなす発言をする者がいたとしても，それを一般の人びとがそのまま受容していったか否かについては検討の余地がある．なぜなら，同一村内に暮らすトゥチとフトゥとは，日常の対面的な次元において，避けがたくのっぴきならない関係性のなかを生きてきた．このとき，フトゥによる破壊行為や略奪が「労働（*gukora*）」と呼ばれていたことにもみられるように（p. 156），日常の延長において暴力の意味を議論しなおしてみる必要があるだろう．

他方で，1994 年以降のルワンダに関する膨大な研究蓄積を前にして，逆説的にも明示されてしまうのは，歴史は描き切れない，ということなのかもしれない．さらに，それらは書かれた歴史を受容する側の時代的，文化的背景にも依存するものでもある．そうであっても，描くことにおいて描かれなかった物事にやっと光が当たり，書かれたものが読まれることで新たな解釈が生まれるのであっ

て，こうした再帰的な営みを，私たち―著者も，評者も，そして読者も―はずっと続けていくのだと思う．歴史を扱う意味について，著者は「望ましい未来についても構想する」（p. 22）ことだと述べ，そこにはある種の祈りのような感情が織り込まれている．昨今のルワンダにかかわる数多の研究者が補い合うなかで，あくまで「書く」という力に自覚的になることにおいて，すこしでも「望ましい未来」を創るためにこそ，私たちは書き続けることを諦めるわけにはいかないのだろう．

著者は幾度か自問する．「歴史に『もし』はないが」（p. 81）と．果たしてそうだろうか？たしかに，起こってしまった出来事を変えることは難しい．ただし，過去は変えられる―．それは，ルワンダの各政権がおこなってきたような，権力者による歴史認識の操作によってだけではない．それは，著者自身がルワンダの人びとに相対するなかで歴史の「上書き」（p. 82）の可能性に触れているように，個々人の認識の次元においても達成されうる．さらには，人びとの身体に積み重なってきた歴史は，突如として不用意に表出するものでもある．そうした個々の記憶のあり方は，著者がジョージ・オーウェルを引用して記すような，過去から未来に至る時間を「コントロールする」（p. 312）力の間隙をすり抜けてゆく．実直な紙資料の解きほぐしの先に，「もし」を覆しうる状況的な真実との格闘へと開かれていくことを，評者は待望している．

歴史はいかに描けるだろうか．本書はこの困難な問いを，私たちに突きつけてくれる．

大石高典・近藤祉秋・池田光穂編．『犬からみた人類史』勉誠出版，2019 年，499 p.

樺澤麻美 *

本書は，総勢 23 名の異なる分野―人類学，民俗学，動物行動学，生態学，遺伝学，動物考古学，動物心理学，科学史，環境学，狩猟，アート―の著者が，人類と犬とのかかわりの多様性とその変遷を，「犬の視点」からみた人類史として考察している．その時間的枠組みは一万年以上前から現代そして未来を眺望し，日本列島，東アジア，ヒマラヤ，アメリカ，オセアニア，アフリカ，西ヨーロッパと，人と犬が生活している世界中の地域を扱っている．本書の構成は，序章と 3 部 19 章と 5 つのコラムと 52 語のグロッサリーからなる．

序章で，まず，人類と犬の出会いを「二足歩行の開始，農牧革命，産業革命などとならぶ人類史を画するできごと」（p. 6）と位置づけ，これを「犬革命」としている．この革命は人類史のある時点の前後で劇的な変化を起こしたわけではなく，また人と犬は生物学的に依存した関係ではないが，その関係は一万年以上にわたって「強制的な手段に寄らない，社会的なコミュニケーションに基づいた異なる社会性動物どうしの共生状況」（p. 19）が，継続的に両者に影響を与えているとしている．また，本書のキーワードとして，「犬の学習とトレーニング」，「犬を飼う

* 京都大学アフリカ地域研究資料センター